ノーブレス オブリージュ
Noblesse oblige

～貴き者の責務～ 日本住宅公団初代総裁 加納久朗（ひさあきら） 第五回

作家 高崎哲郎

〈その家系④〉
文明社会の華族に列して
～夜明けの旗、父久宜（ひさよし）の人生と偉業②

加納久朗の父久宜の後半人生を描く。明治27年（1894）1月、46歳の加納久宜は鹿児島県知事に就任する。日清戦争の最中であった。『アメリカ生活 60年、在米同胞の一人として』（加納久憲自叙伝）には、東京から遠隔の地に赴任する家族の様子が描かれている。久憲は久宜の3男で、久朗の弟である。（久宜は加納家従来の信仰である日蓮宗を捨て神道の信者となる。）

「（久憲が）5歳の頃、父が鹿児島県知事を拝命した。自宅（東京・大森の私邸）は東京市長になられた尾崎行雄御一家に貸していた。父は鹿児島県知事に任命されるまで貴族院議員であり、大審院の検事をしていた。当時鉄道は東京から広島までで、鹿児島に行くには神戸まで汽車で行き、それから1000トンもない小さな汽船で行くのが一番便利だった」、「加納家一行は、両親の他、祖母、姉2人、兄（久朗）、久憲、妹4人、乳母2人、子守1人、農業の出来る男僕1人とでなかなかにぎやかだった。途中京都に一泊してインクライン※を見学した。運河に水が勢いよく流れていて橋を渡る時誰かが私を背負ってくれた。琵琶湖疏水（そすい）工事は明治24年に完成して、当時日本一の大きな土木工事で琵琶湖の水を京都に引いたのである」、「神戸港での乗船の模様などは少しも記憶にないが、日向灘では悪天候で小さい船はずいぶん動揺したようで、目を覚ましたら姉や兄がベッドにいるのが見えた。妹と私は幼少であったから、マットレスを客室のフロアに敷き、そこに寝かされたようだ。その頃、鹿児島県には鉄道はなく、電灯も電話もなかった…」

久宜は明治33年（1900年）9月に辞するまで6年8カ月の長期間、鹿児島県政に尽力する。着任時の県政界は、吏党と民党の政争が極点に達し県政は空洞化していた。彼は不偏不党を高く掲げ県人事の公平を図り、県内をくまなく巡視した。離島にも足を延ばして県民と膝を交えて啓発に当った。明治10年の西南戦争で多くのヒト・モノ・カネを失い田畑も荒廃した県を一躍模範県に導いた。「鹿児島県に加納久宜が印（しるし）さなかった足の跡はなく汗の落ちていない土地はない」と言われる所以（ゆえん）である。

◇ ◇

農業県である鹿児島県は、台風襲来や火山灰土壌という劣悪な自然条件に加え、西南戦争後対立が激化して停滞したままだった。大阪の市場では鹿児島産の米は「劣悪米」の扱いを受けた。久宜は農業改良のために明治27年農会規則を公布した。28年から実施に移し、農村農会から郡農会、県農会を系統的に組織化していった。農家小組合を普及奨励して、3年後には906組合に及んだ。全国に先駆けて耕地整理を実施して湿田の乾田化を図った。徹底した指導の結果、50万トンの産米は90万トンに増えるとともに、明治35年頃には、薩摩米の評価は全国第5位にランクされ、大正元年（1912）には2位にまでなって、「劣悪米」の汚名を返上した。加納知事時代の品種改良、石灰肥料の禁止、正条植え（米の苗を縦または横に一列にそろえて植える方法）普及、肥料作りと農具の製作などの成果であった。この他、ミカンの改良、桑畑の奨励、馬匹（ばひつ）（農耕馬）改良、養鶏の勧め、養魚・遠洋漁業の奨励、薩摩焼の改良を図った。

久宜の足跡は離島にまで及んだ。喜界島（きかいしま）の「加納松」を例に取ろう。大島郡喜界島は周囲8里（1里は4㎞）の孤島、人口は当時2万7000人。明治29年に島を視察した知事加納は、煮たきや暖房などの燃料が牛馬のフンを乾燥したものか枯葉であることに気づいた。理由を聞くと「昔から樹木の育たない島だ」という。島は草原ばかりで樹林らしいものがない。だが雑木林は生えているし、土質も本土と差異があるようには見えない。そこで久宜は戸長に植林の必要を説き、帰任早々私費で2万本の松苗を買って喜界島に送った。これらの松苗は、「不毛の島」の伝承を覆（くつがえ）して生成し、村も年々松苗を購入して、やがて松材輸出の離島振興策に発展した。島民は2万本の松を「加納松」と呼ぶようになった。大島のタバコ耕作を普及させたのも知事加納だとされる。（『刻まれた歴史』（中村信夫）を参考にし一部引用した）。久宜は、土木事業も推進し、川内の太平橋の鉄筋架橋や鹿児島港大改修計画の確定などを行った。

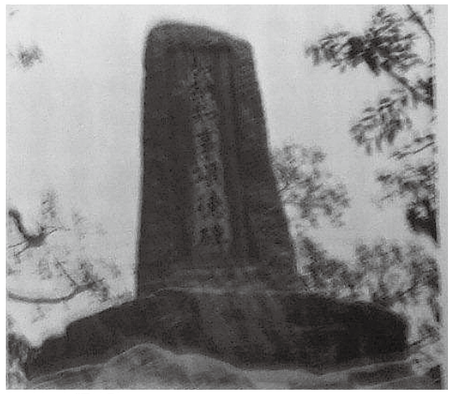
◇ ◇

久宜の事績のうち、農業と同様全国に影響を与えた教育行政は明治初期に加納自身が教育界に身を置いていた得意分野であり、適切な就学督励により大きな成果を挙げている。知事就任時の鹿児島県は、全国に比して就学率が低く、とりわけ女子の就学率は明治26年でようやく26％という有様であった。明治30年の時点で、全国の就学率は66・65％に対し同県は56・30％と低かったが、33年には一気に88・38％と、全国平均81・67％を越え上位に躍り出る。『鹿児島県教育史』には、この間の状況は「異常な努力による」ものであり、「文部省をはじめ全国から見学者が多数訪れた」とある。市町村費（予算）の過半は教育費が占めており、全国比でも高いとしている。

久宜は小学校の就学率の向上に向け、教員を育成し教育組合の設置を奨励する。その普及を目指して、父母に幻燈※で教育の必要性を説得し彼自ら遊説して回った。父母の教育費負担を軽減するため、学具や書籍の共同購入を勧める。女子の就学促進として子守学級の設置や玩具（加納自ら購入）の導入を図った。通学することが生活に直ちに役立つような農業に関する授業を取り入れ、女子には裁縫を教えるなどして、生活に即した魅力づくりを行っている。彼は県私立教育会や加納文庫（県立図書館前身）を設立した。加納文庫は私費を投じたものである。

久宜は小学校の就学率の向上だけでなく、上級学校の整備にも力を尽くした。県内中学校の整備はもちろんのこと、中学校受験者数の多さに対しては、生徒の卒業後の進路を考え、実業教育が有効と判断して、県立の商業学校や女子興業高校といった卒業後の実業に即した学校を設置した。農業振興に向けて、明治28年に鹿児島簡易農学校を設立し、その後順次これを充実させ、明治33年には鹿屋に農業学校（後の官立第二高等農林学校）を移転させ地域の核とした。

第七高等学校造士館（現鹿児島大学）の設立にも尽力している。招致した教育者岩崎行親（ゆきちか）は県立第一中学校校長、第七高等学校初代校長として、県の教育に大きな力を発揮した。



加納知事頌徳碑
（鹿児島県庁内、『刻まれた歴史』（中村信夫））

加納の知事退任後も県に残り教育に尽力している。岩崎行親（安政2年（1855年）-昭和3年（1928））は、香川県三豊郡豊中町に生まれる。20歳の時東京英語学校に学ぶ。内村鑑三、新渡戸稲造、廣井勇らと同級で、翌年共に札幌農学校（北大前身）に入学した。同校卒業後、北海道と大阪で官吏となり、辞して東京で私塾を開く。明治27年、県知事に命じられた久宜に教育と勧業の知事顧問として鹿児島行きを懇請され、鹿児島尋常中学校（後の鹿児島一中）の校長となる。在任は7年余に及び、名門校として伝統を築く。川内（二中）、加治木（三中）、川辺（四中）の中学校の創設に尽力し、創設時の校長を兼務し、鹿児島県旧制中学校「教育の父」となった。さらに明治34年（1901）には、第七高等学校の創立に成功し初代校長となり、11年間その職にあった。その間七高の経営に情熱を傾け、教授陣の充実と質実剛健の気風を作り上げ幾多の人材を育て鹿児島県の高等教育の基礎を築いた。知事加納の勧業顧問として米作改良・排水工事・種苗改良などを進言した業績も評価されている。

久宜は、知事在任中一日も病欠せず早出晩退の勤務で部下に範を垂れた。多額の私費を投じて県政に尽くし、その結果2万円（今日の数千万円）の借金を負うに至った。栄転の機会は何回かあっ

※南禅寺の近くにある全長 82m の世界最長の傾斜鉄道。高低差約 36m の琵琶湖疏水の急斜面で、船を運航するために敷設された

※写真フィルム・図版・実物などに強い光を当てて，レンズで幕などに拡大映像を投映して見せるもの。スライド

たが、彼はその都度断っている。家族全員を引き連れて鹿児島入りした彼は、鹿児島のために人生をかける決意であった。県民は彼を「勧業知事」「教育知事」として讃えた。「鹿児島県のことは冥土に電報せい」と遺言を残したほど同県を愛した。鹿児島市田之浦公園で開かれた知事送別会には3000人が集まった。謝辞のやり取りの間、感極まって泣き出す県民が少なくなかった。

没後の昭和17年（1942）11月、県議会堂前に知事加納久宜の頌徳碑が建てられた。除幕式には遺族が招かれている。碑文の中に「産業と教育の拓興に寄与する所絶大なり。常に責任を重じ言行一致、若し公費足らざれば補ふに私費を以てせるもの又少なからず、所謂民あるを知って身あるを知らず、国あるを知って家あるを知らざるもの、其至誠誰れか感動せざるものあらんや」とある。鹿児島県の経済や教育の基盤を確立した久宜の功績は歴代知事中第一（『鹿児島大百科事典』）とされる。

◇　◇

明治33年秋、久宜は鹿児島を去って東京府入新井村大森（現東京・大森）の私邸に戻ると、農事改良の全国普及に向けた遊説や講演を行い信用組合を開設した。明治後期の「地方改良運動」の中心的命題2つに対応する農会法と産業組合法の改正、「全国農事会中央会」、「大日本産業組合中央会」の法制化や設立にエネルギーを注ぐ。農会法の成立と同じく明治33年に産業組合法が成立し、信用組合、販売組合、購買組合、生産組合の4種が定められた。（所得税、営業税は課税されない）。その後、明治39年の第一次改正で信用組合に他事業兼営が認められた。

久宜は全国的な活動を行う一方で、入新井村の住民として地域で学務委員を務め、明治35年産業組合の効果を村民らに説いて入新井信用組合（現城南信用金庫）を自宅に開設した。開設までに1年余りかかった。自ら会長となり夫人鎰子を会計係として運営に当った。信用組合の活動により、荒れた地域を一躍模範地区へと導いていく。彼は組合に対する考えを著書『献芹迂言』で論じている。その思想は「資本と労働は本来一本にすべきもの」ということであり、同書は彼の先駆的産業組合論に貫かれている。

彼によれば「産業組合事業は町村経営の最要件で地方改良事業の一要件」である。「町村の改進は先ず其人を造るに在り」（『町村経営』）のなかで、富者と貧者の差が広がっており、放置すれば犯罪が増え、消極的国税を負担しなければならない。産業組合は小農商工者のための国民銀行とも言えるもので、恵まれた層の人も率先して設立に協力する義務がある。入新井村のような小組合が全国1万2000余の町村に出来て、仮に3万円の資本を得たら、全国では3億6000万円の全国小農商工者の資本となるとその効用を説く。当時の国家予算は1億6000万円で2倍以上の巨額である。明治33年末わずか21組合だった組合数は、37年末には1232組合と急速に拡大して行き、産業組合の主導者の政治家平田東助（「産業組合の父」と呼ばれた）や久宜は民間への教育、指導、官庁との意見交換の場が必要と考え日本産業組合中央会の設立へ向かう。城南信用金庫は国内トップクラスの信用金庫に発展※する。

東京・大森の加納家邸宅跡（現在、大田区山王3丁目、皇室御訪問の碑がある）

◇　◇

久宜は鹿児島時代から「馬匹改良」に並々ならぬ意欲を持ち努力を続けて来た。自動車の限られていた当時、馬は人や荷物の運搬だけでなく農作業などにも不可欠であり、軍民いずれにとっても動力として極めて重要なものであった。だが当時の国産馬は、体格、能力ともに劣り、その改良が国家的課題となっていた。馬匹改良の一環として、馬への関心を高めるため久宜が代表となり実業家安田善次郎らと「競馬」開設を国会へ建議し、東京競馬会の初代会長となった。また彼は岩手県時代から体育教育の振興を重視しており、入新井村時代にも日本体育会体操練習所（現日本体育大学）会長として、また荏原中学（現日体荏原高等学校）校長として洋式体育教育の普及とレベルアップに努めている。

彼は大森駅周辺に住む著名人により明治39年に設立された大森倶楽部の第2代会長に就任する。（初代会長は司法官児島惟謙、第3会長は政治家清浦圭吾）。多士済々な会員同士の意見交換と地域貢献を図る事を目的に、毎月1回の定期的な会合を設けた。会の発起人に、実業家矢野恒太（第一生命保険創業者）、政治家大江卓らが名を連ね、「大森の貴族院」と称された。明治45年（1912）3月7日、キリスト教指導者内村鑑三（50歳）が久宜に招かれ、大森倶楽部で講演した。加納の子息久朗が内村の門下生となっていた縁で招待したのである。この日は大森倶楽部の創立記念日でもあった。演題は「基督教と其信仰～イエスを友とするに外ならず～」で、講演内容は「聖書之研究」（第141号）に「大森にて」と題して掲載された。（加納家と内村の交流は後章で詳述）。久宜の顕彰碑が大田区立入新井第一小学校の片隅に残されている。

顕彰記念碑（大田区立入新井第一小学校内）

◇　◇

明治45年（1912）2月、久宜は郷里の一宮町民に懇願され町長に就任する。64歳。町長就任に先立ち、町是のない行政は羅針盤の無い船のようだとして『一の宮町是を定め置くべきの議』を当時の一宮町長に提出している。久宜の経験や見識が網羅された内容で、松林、桜並木、公園の整備、主要街道などへ街灯を設置し、旅館の誘致。病院、幼稚園、図書館の設置。販売組合、菜果組合をつくり、生産者と別荘住人の両者の便宜を図る。直売市場の開設。別荘住民のために池に放魚（釣り）、娯楽施設をつくる。品評会を継続的に開催し、売上金を教育基金に組み入れる等など。ここで提示された地域の特性を活かした別荘地の整備、産業推進や地産地消の発想、農事の共同作業及び企業への直接販売といった具体策は、そのまま現代の地方振興策に適用できるような斬新さである。久宜はドイツ式耕地整理を実施し農地利用の基礎を築いた。同耕地整理は、田畑はもとより荒れ地を長方形に線引きしなおして開発し碁盤の目のように均整のとれた耕地にして再配分するという今日の土地改良の先駆けをなす手法であった。

加納町長のもとで、太平洋に面した一宮町は大変貌を遂げ、「東の大磯」として一時は100人を超す人の別荘地としても繁栄して行く。同町には明治30年（1897）4月房総鉄道（現JR外房線）が開通し上総一ノ宮駅と東京・本所とを5時間で結んだ。駅から一宮海岸まで2㎞余りである。海岸線から北は緑の松林と九十九里の弧を描いた砂丘が延々と続き、南はそれが太東岬で区切られて、南北とも雄大な景観を呈している。『一宮町史』は同町に別荘をかまえた各界名士83人の名前をあげており、その中には首相を務めた斎藤実、平沼騏一郎、加藤友三郎らの名もみえる。一宮海岸は海水浴場としても知られていた。海水浴もかねてこの地を訪れた名士として、東郷平八郎、尾崎紅葉、東京帝国大学生の芥川龍之介、同久米正雄、林芙美子らの名前をあげている。一宮海岸がにぎわったのは日中戦争が始まる昭和12年（1937）頃までであった。

晩年の久宜に面会した宇都宮高等農林学校（現宇都宮大学農学部）校長三浦虎六はその印象を述べている。「長身の穏やかな風貌の方であった。ちょうど一宮町長を引退されて悠々自適されて居った。この風貌のなかに永遠の青年ともいうべき情熱が潜められていた」。

慶応3年（1867）19歳で最後の藩主となり明治維新を迎えてから45年を経て、明治45年（1912）64歳となった加納は再び町長として最晩年の5年間を一宮町で過ごした。大正6年（1917）3月、69歳で町長を辞任した。同年一宮町の青年70人とともに鹿児島を再訪し歓迎された。大正8年（1919）2月26日、療養先の温泉郷別府で逝去した。享年71歳。遺言は「一にも公益事業、二にも公益事業、ただ公益事業に尽せ」であった。一宮町城山に久宜の墓と顕彰碑がある。

一宮の海岸（戦前は別荘地だった）

（参考文献：『加納久宜集』（松尾れい子編）、『鹿児島大百科事典』、『刻まれた歴史』（中村信夫）、『加納久宜―鹿児島県を蘇らせた男』（大囿純也）、『大森倶楽部百年史』、『一宮町史』、『千葉県の百年』、『大田区史』）。

（つづく）。

※資金量の順位　1. 京都中央信金、2. 城南信金、3. 岡崎信金
融資量の順位　1. 京都中央信金、2. 城南信金、3. 京都信金
（平成24年度現在）